

〈対句〉で読む小島ゆかりと桑原正紀

山下 佐保

これやこの行くも帰も別わかれつつ知るも知らぬ
もあふさかの関 蟬丸（後撰集 雑一）

百人一首でよく知られた歌である。逢坂の関という歌枕を解説した傍観的、観念的な歌という印象を持っていたが、先日、この歌のイメージが一変する体験をした。能『蟬丸』を観たときのことである。蟬丸という人物については諸説あるが、能の物語では、延喜帝（醍醐天皇）の皇子で盲目ゆえに父帝に疎まれ逢坂山に捨てられてしまう悲運の人である。憐れみをうけて蓑と笠、杖ばかりを与えられ、粗末な庵でひとり琵琶を弾き孤独を慰めている。そこへ一人の狂女が通りかかり琵琶の音を聞きとめる。この狂女こそ「逆髪」といって蟬丸の実姉であり、逆髪も生まれつき髪が逆立つという不思議な障がいを抱えて狂乱し、放浪していたのであった。この姉弟がいかなる運命のいたずらか、一瞬の邂逅を遂げるのである。二人は奇跡の出遭いに感涙し喜びあうが、それも束の間、また逢坂山で別れ、それぞれの不遇な人生を歩み続けてゆく。逢坂山での邂逅は、二人の人生の悲劇性を何ら変えることはない。ただその出遭いの一瞬の交叉のきらめきが闇夜を照らす灯のようにかがやくのである。

このような悲劇の中で冒頭の歌を読んだとき、人生における出遭いの有難さ、別離の哀しみという普遍性がしみじみと思われ、不思議に奥行きのある歌だということに気づかされた。「行くも帰るも」「知るも知らぬも」の対句は、この世のすべての人を、会者定離の掟の中に平等に放り出すかのようだ。単純にみえる対句の中に人生の悲喜がこめられたこの歌をヒントに、現代短歌における対句表現に焦点を当ててみたいと考えた。今回は小島ゆかりと桑原正紀の歌を読み比べながら対句のある歌を味わっていききたい。

まず桑原の歌を引く。

賢くて愚かなるホモ・サピエンス火もて榮
えて火にて滅びむ 『花西行』

天災にまぎれて知らんぷりをする人災いく

つ原発事故また 同

東日本大震災時の天災と人災を対比した歌である。一首目は痛烈な文明批判であり、火をもてあそぶ賢しら顔の人類の末路を憂うものである。二首目は原発という明らかな人災をごまかそうとする卑劣な政治のあり方を厳しく問う。次に小島ゆかりの歌を引く。

災害で死ぬ子、虐待で死ぬ子あり 小さい
秋をみつけるまへに 『馬上』

「だまされてはいけません」あれど「だま
してはいけません」なしバスの放送

『泥と青葉』

一首目、天災と人災を「死ぬ子」の上に対比する。虐待と
いう非人道的行為への怒りがしずかに表現されている。二首
目は「だますこと」の非を「だまされること」の上に置いて、
世の中の矛盾を突き、当たり前のことにはつと気づかせてく
れる。両者とも、天と人（あるいは人と人）との対照によつ
て人間の愚かさを際立たせた歌といえる。

卓上に寄り添ひふるさと語りする大和の柿
と信州の林檎 桑原正紀『秋夜吟』

豊後より梅酒、阿波より酢橘すだぢきて武蔵野は
霧ふかき晩秋 小島ゆかり『馬上』

いずれも秋の食物を対句として配置した歌である。一首目
は、柿と林檎を擬人化して語らせ、産まれた違う二つのもの
の、ふるさとの風景までも想像させ詩情をかきたてる。二首
目も産地の異なる果実を、その酸味のイメージでくきやかに
印象づけながら作者の現在空間に置くことで晩秋の風情を豊
かに描く。いずれも組み合わせの妙が効果的な歌である。

鎌倉や月は照りつつ眉うすき貴族、眉濃き
武士のおもは 小島ゆかり『馬上』

抒情するのみぢ、思惟する常緑樹こもごもに日本の秋深
まりぬ 桑原正紀『天紺』

一首目、「鎌倉」からいにしへの武士と貴族の抗争の歴史
を思わせ、「月」から連想される両者の「眉」を対比するこ
とで叙情的な世界を作り出している。二首目は変化する紅葉
と不変の緑を対比して擬人化する。紅葉は女性で常緑樹は男
性、あるいは前者は若者で後者は老人の比喩、と読んでみて
も味わい深い。

姉の部屋整然として妹の部屋雑然として梅
雨に入る 小島ゆかり『泥と青葉』

秋のひと白秋、冬のひと柗たけ二おもひつつゆ
く秋冷のあさ 桑原正紀『天紺』

一首目、姉妹の性格の違いを漢語で端的にとらえ、ユーモ
ラスである。二首目、「白秋」と「柗二」、それぞれの名前の
中に含まれる季節を、両者のイメージや本質として言い当て、
説得力がある。師弟関係にある二人を詩的に並べながら、ま
たその秋と冬の間に（二人の系譜の先に）作者が存在するこ
う、象徴的な構図も見事である。

次に小島の歌二首を引く。

雨中より地下へ降りつつ若者は激はげき瀧、わ
れはゆるやかな瀧 『馬上』

ああ五月、未来長者の若者にまじりてさわ
ぐ過去長者われ 『雪麻呂』

一首目、若者と対比される老年の「われ」を「瀧」に喩え
た。「瀧」の字は「龍」をイメージさせ、両者の勢いの差を
対照的に、的確に描いている。二首目は与謝野晶子の「ああ
皇月仏蘭西の野は火の色す君も雛髻栗われも雛髻栗」を本歌

取りにしながら、「未来長者」「過去長者」という造語を巧みに用いて、「若」と「老」との対比を、詠嘆をこめて描き出している。

次は桑原の歌二首を引く。

消えゆかむいのち未だ生まれざるいのちを

いまし祝ぎたるやうな 『花西行』

乳母車と擦れ違ふとき幼な子が車椅子の妻

をじつと見つめる

同

一首目は、妊婦である看護師が終末医療を受ける老人と向き合っている場面である。生と死の対比にとどまらず、生の交替ともいえる厳粛な場面を作者の眼は鋭敏にとらえている。

二首目は乳母車と車椅子が対照され、生まれたばかりの幼児が病む妻を無心に見つめるさまが描かれ、二者の魂が交感しているようにも感じられる。

次は猫の歌を引こう。まずは小島の歌から。

古猫の髭はしみみに若猫の髭はきららに月

に照らさる

『馬上』

彼は毛にわれはしがらみに覆はれてまたも

猛暑の夏は苦しむ

『六六魚』

一首目、古猫と若猫の髭が「しみみ」「きらら」という月と相性のよい擬態語によって対比的に詠われ、二匹の猫の異なる風貌を詩的に描いている。二首目は猛暑の夏を苦しむ「人間」の姿が、猫の「毛」との対比によってコミカルに描き出されている。

次に桑原の猫の歌である。

三毛猫のなきがら挟み一匹と一人が夜半を
黙ふかくゐる 『天意』

漢一人牡一匹になりし家かたむく船にゐる

心地せり

同

愛猫の死を悼む一連の歌である。一首目は牝猫に先立たれた牡猫の悲哀が、病気で不在の妻を案じる夫である作者の心と重ねられる。二首目は、かつて夫婦と愛猫二匹と暮らした穏やかな時間の追憶を思わせ、哀切である。「一匹」と「一人」はこの場合、対比というよりもむしろ、互いに心を寄り添わせる「同士」ともいうべき存在である。メスの不在を恋う生き物としての「同士」とも。

次は介護、看護の歌を引く。

終はれよと思ひ終はるなと思ふ介護のこころ

ろ冥き火を抱く

小島ゆかり『馬上』

絶望と希望とふたつ緬ひまぜに引き絞らる

るわが心はも

桑原正紀『妻へ。千年待たむ』

一首目は相反する介護の心を率直に詠い、真実味がある。

「冥き火」には自らの心を凝視する内省的な苦悩が見て取れる。二首目は生死に関わる病に倒れた妻の回復を待つ日々の中で生まれた歌である。妻の病状が切迫する状況にあつて作者が味わった絶望と希望はそれぞれに測りしれない激しさがあったことだろう。両者とも介護、看護を通して苦悩する自らの心を真摯にみつめた、実感のあるリアリティの高い歌であると思う。

次にまた小島の歌を引く。

亡き人は在り在る人は亡きごとし大通り夏のしろさとなりて

『馬上』

花咲けばあの世のごとし行く人も来る人も顔しろくほほゑむ

『六六魚』

晩夏光シャツを照らせり少年の白、老年の白となるまで

『はるかなる虹』

一首目、「亡き人」「在る人」が対句となつてゐるが、この歌は不思議に両者が入れ替わるように作られてゐる。作者は彼岸と此岸の境界にふと迷ひこみ、どちらの世界をも見てゐるのだろうか。さらに二首目を読むと彼岸と此岸、「在る人」「亡き人」はそもそも区別されるものだろうか、と不思議な感覚に陥つてしまふ。三首目は、少年の着るシャツの「白」がいつしか老年の「白」へと転じていく。同じ白でも両者の色合ひはまったく違ったものに思えるから不思議だ。ここにも時空を超えて現在と過去を行き来する詩人の眼がある。

最後に桑原の歌を引く。

車椅子押して坂道のぼるとき「よいしょ」と言へば「ヨイシヨ」と妻言ふ

『妻へ。千年待たむ』

「きれいだね」「キレイネ」こんなさりげない会話がすつとできる喜び

同

「疲れた」と大きく息をつきをれば「ごくろうさま」と言ひくれにけり

『天意』

一、二首目、重篤な病からようやく回復して発語できるよ

うになつた妻の言葉が、歌集「妻へ。千年待たむ」ではカタカナ表記になつてゐる。平仮名の夫の声とカタカナの声の応答は一見、大人と子供の会話のような感じでもあるが、妻の発する一つ一つの言葉が宝物のように尊く受け止める作者の思いが伝わる。三首目は、看護の現実を思わせてあまりあるが、それ以上に妻の言葉が作者の救いになつてゐることに胸を打たれる。平易な会話の対句だが、夫婦が互いをいたわりあう深い心がうかがわれ、温かい。続けて同歌集から引く。

花と妻の歡ぶこゑが交叉してわれもこよなくしあはせである

同

「見て、見て」と辛夷が笑ひ「きれいなね」

同

妻と花との対比の、なんと美しいことか。一首目は薔薇の花と妻の歡ぶ声を同じものとして聴く鋭敏な感覚が、作者の幸福感を引き立ててゐる。二首目では辛夷の花も妻も同じように「笑う」存在として意識される。花と妻は、植物と動物の垣根を超え、同じ生き物として、「生」の喜びの中に、無心に存在してゐるようだ。作者には実際に、妻を喜ばす花の声や表情が生き生きと感じられるのだろう。また、どちらの歌も「花」が先に詠われている点もこれらの歌の純度を上げているゆえんであるように思う。「花」という自然の前に人の「生」のありようを無心に見つめ、妻の精神性が自然に近づいていくことの尊さに気づかされる。人間が自然とともに「生かされている」実感を表した、すぐれた対句表現だと思ふ。